東京家政学院筑波女子大学紀要第８集　59～67ページ　　2004年

韓国語における連体修飾語「의（uy）」について

― 名詞化による「－ㅁ（m）」名詞と「－기（ki）」名詞を中心に ―

金　　河守

The Use of the Korean Ad-nominal Modifying Marker-uy

Hasoo KIM

Abstract

This article investigates the conditions on the use of the Korean ad-nominal modifying marker -uy, corresponding to the Japanese particle -no. The investigation focuses on constructions involving [-m] nominalizations and [-ki] nominalizations in the NP_2 position of [NP_1-no NP_2] structures.

The aim of the investigation is to clarify the influence of NP_2 on the properties of the construction. The investigation has revealed that [-m] nominalizations, which have strong nominal features, are in an external argument relation to NP_1 and the use of [uy] is obligatory, whereas for [-ki] nominalizations which have strong predicative properties, NP_2 has an internal argument relation to NP_1 and [uy] need not be present.

キーワード：韓国語の連体修飾語「uy」　出現条件　「－ m」名詞「－ ki」名詞　項関係

１．はじめに

本稿では、日本語の連体修飾語「の」（名詞句と名詞句を結ぶ助詞、以下「NP_1の NP_2」のように表記する。）にあたる韓国語の「의（uy）」について考察する[1)]（韓国語の表記にはMartin et al. 1967のローマ字表記法を用いる）。考察においては、韓国語の名詞化接尾辞である「－ㅁ（m）」と「－기（ki）」によって名詞化された名詞（以下「－ m」名詞と「－ ki」名詞のように表記する）を中心に調べることにする。

韓国語の連体修飾語「uy」に関する今までの研究は、「uy」の持つ意味に着目しているものが多く、「uy」の意味分類、あるいは「uy」の出現有無による意味の違いといった用法に焦点が当てられてきた。しかも、このような意味機能をめぐるアプローチは、広範囲にわたる「uy」の現象をとらえているものが多く、分析の結果は抽象的な説明に終わっ

ているものがほとんどである。そのため、韓国語の学習者にとって「uy」の問題は、その意味機能に関する理解にとどまっており、出現規則に関する理解には至っていないのが現状である。とくに日本語を母語話者とする学習者においては、日本語の「の」の影響により「uy」を多用する傾向にあるため[2)]、日本語との対照も必要となる。

したがって、本稿では、従来の広範囲にわたる分析方法を採らず、韓国語の連体修飾語「uy」における出現条件の一部を究明することにする。分析にあたっては、考察の対象を「－ m」名詞と「－ ki」名詞に限って調べる。その理由は、韓国語の名詞化接尾辞である「－ㅁ（m）」と「－기（ki）」によって名詞化された「－ m」名詞と「－ ki」名詞は、両方とも動詞から名詞化されたといった同じ条件を持つ名詞でありながらも、おのおのの「NP_1の NP_2」における「uy」の出現条件に差が現れるからである。分析方法としては、「－ㅁ（m）」と「－기（ki）」によって名詞化される前の述語（名詞文を除く動詞・形容詞・形容動詞を指す）を項の数[3)]により分類し、それらの述語のもつ特性と「uy」の出現条件との関わりを探る。

２．先行研究

최경봉（1995）は、韓国語の「NP_1の NP_2」の名詞句形成における規則化を NP_1と NP_2の意味関係から分析している。分析の結果、NP_1と NP_2が格関係をもつ項関係タイプと NP_1と NP_2が単なる修飾関係にある集合関係タイプ[4)]の二つのタイプがあるといい、「NP_1の NP_2」における意味関係が構造の生成と関連していると述べている。ここで項関係タイプとは、先行名詞 NP_1が叙述性名詞 NP_2と格関係にある構成のことをいい、NP_1が NP_2の目的格の関係にあるものと NP_1が NP_2の主格の関係にあるものを例に挙げている。

（韓国語で書かれた先行研究における日本語の訳は筆者の訳であり、できるだけ韓国語の意味を損なわないように直訳を付けている。また、筆者が付けた日本語訳の例文に関しての判定は行わない。）

（1）　a .문제의　해결　／　b .문제　해결
　　munceyuy　haykyel　／　muncey　haykyel
　　問題の　解決　／　問題　解決

　　c.문제를　해결하다
　　munceylul　haykyelhata
　　問題を　解決する

（2）　a .범인의　도피　／　b .범인　도피
　　peminuy　tophi　／　pemin　tophi
　　犯人の　逃避　／　犯人　逃避

　　c.범인이　도피하다
　　pemini　tophihata
　　犯人が　逃避する

（1）（2）では、「NP_1の NP_2」における NP_2の叙述性名詞の部類によってその項関係が変わることを示しているが、「NP_1の NP_2」における「uy」の出現条件に関してはどの項関係においても出現可能・省略可能との見解を示している。「NP_1の NP_2」における意味関係を深層構造の項構造を持って説明しているところは本稿の立場と同様であるが、「uy」の出現条件に関する分析には問題点が残る。

第一の問題点は、NP_1が NP_2の目的格の関係にある（1）の場合、NP_1に焦点を当てる特別な制限がない限り（金明姫（1987）の具体化機能[5)]）、「uy」が出現しないのが自然である。とりわけ、このような表現に関しては、日本語を母語話者とする韓国語の学習者における「の」の多用が多く見られるため、その理由を明確にする必要があると思われる。

第二の問題点は、NP_1が NP_2の主格の関係にある（2）の場合、「범인　도피　犯人逃避」は「uy」が出現している「범인의　도피犯人の逃避」の方が自然である。たとえば、NP_1

の位置にNP_2の「逃避」と語用的に遠い「大統領」が現れた場合、「uy」の出現しない「대통령　도피［taythonglyeng tophi］大統領逃避」はかなり不自然である。それは、NP_2に現れる「逃避」という動名詞の性質とNP_1に現れる名詞との意味的な緊密さが関連しているように推測される。ところが、本稿ではNP_2に現れる動名詞の問題は取り扱わないため、この問題に関しては深くふれない。ただし、格関係による違いが「－ m」名詞と「－ ki」名詞に関しても現れるのであれば、問題を解決する上で一つの手がかりとなるであろう。

本稿では、このような問題点を解決するためにNP_2に現れる「－ m」名詞と「－ ki」名詞を中心に、名詞化される前の述語の特性と項構造とを関連づけて考察することにする。

３．「NP_1のNP_2」における「－ m」名詞と「－ ki」名詞

３．１．「－ m」名詞と「－ ki」名詞の特性

沈在箕（1980）は、韓国語の名詞化接尾辞には、「－개（kay）」「－애（ay）」「－이（i）」のような述語の叙述性を完全に失わせる転成名詞化接尾辞と「－ㅁ（m）」と「－기（ki）」のように述語の叙述性を残す動名詞化接尾辞があると指摘している。

本稿では、述語の叙述性を残すといわれている「－ m」名詞と「－ ki」名詞が名詞化される前の述語の特性と「uy」の出現との関わりを調べることにする。そのためには、「－ m」名詞と「－ ki」名詞がそれぞれどのような特性を持っているかを考察する必要がある。

홍종선（1983）は、名詞化語尾「－ m」と「－ ki」によって名詞化された「－ m」名詞と「－ ki」名詞の名詞性について言及している。具体的には、「－ m」名詞の方に感情・状態の意味を持つ名詞が多くみられ、「－ ki」名詞の方に動作性の強い意味を持つ名詞が多く見られると述べている。また、「－ m」名詞と「－ ki」名詞における意味的な違いだけでなく、おのおのの名詞における形容詞・副詞・「uy」との共起関係などを挙げて「－ m」名詞の名詞性の高さをも証明している。（韓国語の「－ m」名詞と「－ ki」名詞の意味的な違いを日本語に直すのは非常に困難である。文脈によって、「動詞の連用形」・「動詞＋の」・「動詞＋こと」のように訳す。）以下、「－ m」名詞の名詞性の高さを証明している例文である。

(3)　친절한　a .가르침을／
chincelhan　kaluchimul／
親切な　教えを／
＊b .가르치기를　원하셔요?
kaluchikilul　wenhasyeyo
教えることを　願いますか

(4)　병사가　많이　＊a .아픔　／
pyengsaka　manhi　aphum／
兵士が　たくさん　痛さ／
b .아프기　때문에　포기하였다.
aphuki　ttaymwuney　phokihayessta
痛さ　のために　あきらめた

(3) の形容詞（韓国語においては）「친절한親切な」と共起できるのは名詞性の高い「－ m」名詞「가르침」で、叙述性の高い「－ ki」名詞「가르치기」は「親切な」とは共起しない。一方、(4) の「많이　たくさん」のような副詞と共起するのは叙述性の高い「－ ki」名詞「아프기」で、「－ m」名詞の「아픔」は共起しないという。ただし、(4) の「～のために・～するので」の意味をもつ「때문에」は今や「기」と連接して「기　때문에」のように使用するのが文法的にも定着している事を付け加えておく。

(5)　너의　a.막음의／
neuy　makumuy／
君の　止めの／
*b.막기의　원인이　무엇이냐?
makiuy　wenini　muesinya
止めの　原因は　なんなの

(5) は、本稿で取り扱う内容と一番密接な「－m」名詞と「－ki」名詞の「uy」との共起関係の例文である。本稿では「NP_1のNP_2」におけるNP_2に現れる「－m」名詞と「－ki」名詞を取り扱うが、ここでは、NP_1に現れる「－m」名詞と「－ki」名詞を取り上げている。ここでは、名詞性の高い「－m」名詞「막음」は、NP_1の位置に出現しており、連体修飾語「uy」との共起も可能であるが、叙述性の高い「－ki」名詞「막기」はNP_1に現れることはできないという。ところが、(5) の例文における「막음의　원인　止めの原因」という表現はそれほど自然な文とは言えない。しいて言えば、「－ki」名詞「막기」より「－m」名詞「막음」の方が現れやすいといえよう。

홍종선 (1983) は、古代の韓国語においても「－m」名詞の方が絶対多数であったこと・形容詞との共起・連体修飾語「uy」との共起などを挙げて「－m」名詞の名詞性の高さを主張しているが、本稿においても「－m」名詞の名詞性に関する見解は홍종선 (1983) と同じ立場に立って論を進めていく。

３．２.「－m」名詞と「uy」の出現

本稿で取り上げる現象を以下のような例を挙げて分析することにする。まずは「NP_1のNP_2」におけるNP_2に現れる「－m」名詞と「uy」の出現との関連を調べる。考察においては、NP_2に現れる「－m」名詞の名詞化される前の述語を項の数により分けて、それらの述語の持つ特性と「uy」の出現条件との関連を探る。まず、その結果を次の表１のようにまとめる。表の見方は、「NP_1のNP_2」と「NP_1NP_2」の成立条件を韓国語と日本語に分けてそれぞれの構造における成立の可否を明記し、その下の段に代表的な例を挙げている。

まずは一項述語から名詞化された「－m」名詞の例をみよう。

(6)　a.양귀비의　아름다움　　*b.양귀비　아름다움
yangkwipiuy　alumtawum　　yangkwipi　alumtawum
楊貴妃の　美しさ　　*楊貴妃　美しさ
c.양귀비가　아름답다
yangkwipika　alumtapta
楊貴妃が　美しい

(7)　a.거리의　번잡스러움　　*b.거리　번잡스러움
keliuy　pencapsulewum　　keli　pencapsulewum
町の　混雑さ　　*町　混雑さ
c.거리가　번잡스럽다
kelika　pencapsulepta
町が　混雑している

(8)　a.마음의　흔들림　　*b.마음　흔들림
maumuy　huntullim　　maum　huntullim
心の　揺れ　　*心　揺れ
c.마음이　흔들리다
maumi　huntullita
心が　揺れる

表１　「－m」名詞における成立条件　(韓：韓国語、日：日本語)

述語の項数	項関係	「NP_1のNP_2」		「NP_1NP_2」	
一項述語	主格	韓：○ maumuy　huntullim	日：○ 心の揺れ	韓：× maum　huntullim	日：× 心揺れ
二項述語	主格	○ sangintuluy　oychim	○ 商人たちの叫び	× sangintul　oychim	× 商人たち叫び
	対格	× chaykimuy　nukkim	× 責任の感じ	× chaykim　nukkim	× 責任感じ

(6)（7）（8）は、主格しかとらない一項述語の例である。それぞれの NP_2に現れている「－m」名詞、「아름다움　美しさ」、「번잡스러움　混雑さ」、「흔들림　揺れ」は、「아름답다　美しい」（形容詞）、「번잡스럽다 混雑している」（形容詞）、「흔들리다　揺れる」（動詞）から名詞化されている。(6) の「아름다움　美しさ」、(7) の「번잡스러움 混雑さ」は状態を表す名詞で、홍종선（1983）にも「－m」名詞の主流をなしているものとの指摘がある。(6)（7）（8）における「－m」名詞は、「NP_1の NP_2」の構造を形成する上で必ず連体修飾語「uy」を出現させているが、それは「－m」名詞の強い名詞性が「NP_1の NP_2」の構造における働きかけであろう。また、(6)（7）（8）における「uy」の出現は日本語とまったく同じ傾向にあることも注目すべき点である。

次は「主格―対格」をとる二項述語の例を見てみよう。

(9)　a.상인들의　외침　　*b.상인들　외침
sangintuluy　oychim　　sangintul　oychim
商人たちの　叫び　　*商人たち　叫び
c.상인들이　외치다
sangintuli　oychita
商人たちが　叫ぶ

(9')　*a.슬로건의　외침　　*b.슬로건　외침
sullokenuy　oychim　　sulloken　oychim
*スローガンの　叫び　　*スローガン　叫び
c.슬로건을　외치다
sullokenul　oychita
スローガンを　叫ぶ

(9) は、「외치다　叫ぶ」という「ガ格－ヲ格」をとる二項述語、しかも動作動詞から名詞化された「－m」名詞「외침　叫び」が NP_2に現れている例である。これは、「상인들이　슬로건을　외치다　商人たちがスローガンを叫ぶ」のような文になるが、NP_2に現れる「－m」名詞と NP_1のに現れる名詞句との関係を探るために主格との共起、対格との共起の二つに分けて調べてみる。

(9) のように NP_1と NP_2が主格の関係にある場合は、「NP_1の NP_2」の構造が成立し、連体修飾語「uy」も出現している。(9b) のように、たとえ NP_1と NP_2が主格の関係にあっても連体修飾語「uy」が出現しないと非文となる。それに対して、(9') のように NP_1と NP_2が対格の関係にある場合は、(9b) とは違うレベルで非文となる。(9') は、「NP_1の NP_2」の表す意味内容が明確に把握できないもので、明確な意味が伝達されないと思う。同じような意味で「NP_1NP_2」も成立しない。このような結果は日本語においてもまったく同じことがいえよう。

これは、「외침　叫び」が「ガ格―ヲ格」の二項述語から名詞化されたものではあるが、「－m」名詞の名詞性が NP_1に出現する深層格を制限しているかのように思われる。つまり、「NP_1ガ NP_2」の方が「NP_1ヲ NP_2」より「NP_1の NP_2」の構造において強い束縛性を感じさせることができるのである。このようなことは、次の感情を表す二項動詞からもうかがえる。

(10)　a.감각세대의　느낌　　*b.감각세대　느낌
kamkakseytayuy　nukkim　　kamkakseytay　nukkim
感覚世代の　フィーリング　　*感覚世代　フィーリング
c.감각세대가　느끼다
kamkakseytayka　nukkita
感覚世代が　感じる

(10')　*a.책임의　느낌　　*b.책임　느낌
chaykimuy　nukkim　　chaykim　nukkim
*責任の　感じ　　*責任　感じ
c.책임을　느끼다
chaykimul　nukkita
責任を　感じる

(10) は、「느끼다　感じる」という感情を表す動詞から名詞化された「느낌　感じ」が NP_2に現れている例であるが、(9) における結果と同じ結果が出ている。これは、状態を表す動詞から名詞化された名詞は、動作動詞よりはるかに NP_1の名詞と強く結束している

からであろう。これらの例から、최경봉（1995）における第二の問題点（NP_1がNP_2の主格の関係にある場合でも「uy」の出現しない「NP_1NP_2」を認めていたこと）は検討の余地があるといえよう。次も「主格―対格」をとる二項述語の例であるが、(9)(10)とは違う結果が出ている。

(11)　＊a.청소년의　들음　　＊b.청소년　들음
chengsonyenuy　tulum　　chengsonyen　tulum
＊青少年の　聴き　　＊青少年　聴き
c.청소년이　듣다
chengsonyeni　tutta
青少年が　聴く

(11')　＊a.음악의　들음　　＊b.음악　들음
umakuy　tulum　　umak　tulum
＊音楽の　聴き　　＊音楽　聴き
c.음악을　듣다
umakul　tutta
音楽を　聴く

(11)と(11')に関しては、NP_1とNP_2が主格の関係にある場合でも、対格の関係にある場合でも「NP_1のNP_2」の構造は成立しないのである。このような現象は、述語が(11)の「들음　聴き」だけでなく、「읽음　読み」「씀　書き」「말함　話し」などにも見られる。これらの名詞は文法的には「－m」名詞のように名詞化されることはできても、慣習的には「－ki」名詞に名詞化されることがほとんどである。たとえば、「듣기　聴き」「읽기　読み」「쓰기　書き」「말하기　話し」「가기　行き」「오기　来」のように「－ki」名詞に名詞化されるとはるかに自然度が高くなるのである。しかし、たとえ(11)が「－ki」名詞「듣기　聴き」に名詞化されても主格の関係にある「청소년의　듣기　青少年の聴き」「청소년의　듣기　青少年聴き」は成立しない。対格の関係にある(11')の「음악듣기 音楽聴き」のような「NP_1NP_2」の構造のみが成立する。これについては、次節で詳しく述べることにする。

以上、「NP_1のNP_2」におけるNP_2に現れる「－m」名詞と「uy」の出現関係を調べてみた。NP_2に現れる「－m」名詞は、NP_1とNP_2が主格の関係にある場合は「uy」を出現させており、日本語と同じ構造をもつことが分かった。一方、NP_1とNP_2が対格の関係にある場合は、「NP_1のNP_2」の構造がそもそも意味的に成立しないため、「NP_1NP_2」の構造も成立しないことも分かった。

３．３．「－ki」名詞と「uy」の出現

次は、「NP_1のNP_2」におけるNP_2に現れる「－ki」名詞と「uy」の出現との関連を調べる。考察方法は「－m」名詞と同様、「－ki」名詞の名詞化される前の述語を項の数により分けて、それらの述語の持つ特性と「uy」の出現条件との関連を探る。ここでも、先にその結果を表２のように示す。表の見方は、表１と同様である。

まず、一項述語から見ていきたいが、「－

表２　「－ki」名詞における成立条件（韓：韓国語、日：日本語）

述語の項数	項関係	「NP_1のNP_2」		「NP_1NP_2」	
一項述語	主格	韓：○（強調機能） panguy　khuki	日：○ 部屋の大きさ	韓：○ pang　khuki	日：× 部屋大きさ
二項述語	主格	× cengpuuy　mouki	× 政府のあつめ	× cengpu　mouki	× 政府あつめ
	対格	× soncauy　tolpoki	○ 孫の世話	○ sonca　tolpoki	× 孫世話

ki」名詞は、そのほとんどが対格をとる動作動詞から名詞化されているため、一項述語から名詞化されるものは極めて少ない。次の例を見よう。

(12)　?a.방의　크기　　b.방　크기
panguy　khuki　　pang　khuki
部屋の　大きさ　　*部屋　大きさ
c.방이　크다
pangi　khuta
部屋が　大きい

(13)　?a.허리의　굵기　　b.허리　굵기
heliuy　kwulkki　　heli　kwulkki
ウェストの 太さ　　*ウェスト　太さ
c.허리가　굵다
helika　kwulkta
ウェストが　太い

(12)（13）は、主格しかとらない一項述語、「크다　大きい」「굵다　太い」から名詞化された「크기　大きさ」「굵기　太さ」が NP_2に現れている。(12）と（13）は、「－m」名詞における一項述語の結果とは違って、日本語においては不自然である「NP_1NP_2」の構造が成立しているのが分かる。「NP_1の NP_2」の判定に関しては「uy」が出現していても非文にはならないが、とりわけ強調している文脈的な制限がないかぎり、「NP_1NP_2」の方が自然であろう。ただし、「－ki」名詞における「NP_1の NP_2」の構造が成立するのは一項述語のみで、叙述性の高い二項述語となると「NP_1の NP_2」の構造は現れない。これは、(12）（13）における「－ki」名詞が状態を表す形容詞から名詞化されたことが起因しているからであろう。つまり、NP_2に現れる名詞がたとえ「－m」名詞ではなくても状態性の残る（名詞性の高い）「－ki」名詞が現れる場合は「NP_1の NP_2」の構造が許されるといえる。 次は、主格―対格をとる二項述語の例を見てみよう。

(14)　*a.할머니의　돌보기　　b.할머니　돌보기
halmeniuy　tolpoki　　halmeni　tolpoki
おばあさんの　世話　　*おばあさん　世話
≠　c.할머니가　돌보다
halmenika　tolpota
≠　おばあさんが　世話する

(14')　*a.손자의　돌보기　　b.손자　돌보기
soncauy　tolpoki　　sonca　tolpoki
孫の　世話　　*孫　世話
c.손자를　돌보다
soncalul　tolpota
孫を　世話する

(14）は、「할머니가　손자를　돌보다　おばあさんが孫を世話する」のような構造をもつ二項述語「돌보다　世話する」の「－ki」名詞「돌보기　世話」が NP_2に現れている例である。ここでも NP_2に現れる「－ki」名詞を主格との共起、対格との共起の二つに分けて調べてみる。

まず、主格との共起であるが、(14b）のような「uy」が出現していない「NP_1NP_2」の構造が成立する。ところが、(14b）の「할머니　돌보기」は「おばあさんを世話する」の意味に解釈されるものであって、けっして「おばあさんが世話する」に解釈されることはない。(14）の例においては、構造的には容認されても格関係における意味と合致しないため、非文となる。

対格の場合も主格と同様、連体修飾語の「uy」が出現していない「NP_1NP_2」の方が自然である。意味的にも「孫の世話」となり、問題はない。ただし、これは日本語においては非文となり、成立しない表現である。

「－ki」名詞における一項述語の場合は、その名詞性が起因して（形容詞からの名詞化）「NP_1の NP_2」の構造が容認されたが、二項述語の場合は「NP_1の NP_2」は容認されない。このような表現はとりわけ日本語を母語話者とする韓国語の学習者には理解できない難解な問題であろう。

次の例においても二項述語における

「－ ki」名詞の現象を考察してみよう。

(15)　＊a.회사원의　부풀리기　　＊b.회사원　부풀리기
hoysawenuy　puphwulliki　　hoysawen　puphwulliki
＊会社員の　水増し　　＊会社員　水増し
c.회사원이　부풀리다
hoysaweni　puphwullita
会社員が　水増しする

(15')　＊a.영수증의　부풀리기　　b.영수증　부풀리기
yengswuzunguy　puphwulliki　　yengswuzung　puphwulliki
領収証の　水増し　　＊領収証　水増し
c.영수증을　부풀리다
yengswuzungul　puphwullita
領収証を　水増しする

(16)　＊a.정부의　모으기　　＊b.정부　모으기
cengpuuy　mouki　　cengpu　mouki
＊政府の　集め　　＊政府　集め
c.정부가　모으다
cengpuka　mouta
政府が　集める

(16')　＊a.금의　모으기　　b.금　모으기
kumuy　mouki　　kum　mouki
キンの　集め　　＊キン　集め
c.금을　모으다
kumul　mouta
キンを　集める

(15)は、「회사원이　영수증을　부풀리다　会社員が領収証を水増しする」のような構造をもつ二項述語「부풀리다　水増しする、膨らます」から名詞化された「－ ki」名詞「부풀리기　水増し、膨らまし」がNP_2に現れている。まず、NP_2に現れる「－ ki」名詞と主格との共起であるが、(14) とは違って (15a) が「会社員を水増しする」のような意味に解釈されることはない。ところが、「会社員の水増し」だけでは意味内容が明確ではないため、非文となる。対格との共起においては、(15) と同様「uy」が出現していない「NP_1NP_2」の構造のみが成立する。(16) の例においても (15) と同じことがいえよう。

以上、「NP_1のNP_2」におけるNP_2に現れる「－ ki」名詞と「uy」の出現関係を調べてみた。① NP_2に現れる「－ ki」名詞は、主格しかとらない一項述語の場合は「NP_1のNP_2」と「NP_1NP_2」の構造が成立しているが、それは一項述語のもつ名詞性に起因していることが分かった。②二項述語の場合、NP_1とNP_2が主格の関係にある場合は「NP_1のNP_2」の意味内容が明確に現れないため非文となる(「NP_1NP_2」も同様)。一方、NP_1とNP_2が対格の関係にある場合は、「NP_1NP_2」の構造が成立し、「uy」が出現しないことが分かった。これは日本語とは違う結果なので注目すべき点であろう。

４．まとめ

以上、韓国語の連体修飾語「uy」の出現条件を、名詞化接尾辞によって名詞化された名詞「－ m」名詞と「－ ki」名詞を中心に考察してみたが、以下のようなことが分かった。韓国語の「NP_1のNP_2」における連体修飾語「uy」の出現には、NP_2に現れる名詞の特性が関わっており、名詞性の高さが「uy」の出現に大きく起因していることが分かった。名詞性の高い「－ m」名詞は「NP_1のNP_2」の構造を深層格の「NP_1がNP_2」において成立させており、叙述性の高い「－ ki」名詞の場合は「NP_1NP_2」の構造を深層格の「NP_1をNP_2」において成立させている。

本稿では、NP_2に現れる「－ m」名詞と「－ ki」名詞を中心に考察をしているが、項の数における制限と他の項関係における出現条件などにおいては問題点も残る。今後、これらの問題点を踏まえてさらに考察を進めていきたい。

注

1）日本語の「NP_1のNP_2」における用法には「NP_1であるNP_2」もあるが、ここでは取り扱わない。

2）日本語を母語話者とする学習者における「uy」の多用においては、正確にデータを取っているわけではないが、韓国語の母語話者にとっては自然度が落ちる文を作成する事が多い。

3）項の数とは、動詞と組み合わされる名詞の数による分類で、角田（1991）を参照。

4）集合関係タイプとは、「NP_1のNP_2」の関係が格関係をもたず、たんなる修飾関係にあるタイプのことをいう。「uy」の出現有無によって三つに分けて分析している。①「NP_1（の）NP_2」の場合は、「uy」が省略可能な場合であるが、NP_1は所有者、NP_2は所有物の関係にある。例えば、「개의　다리［kayuy tali］犬の足」、「철수의　손［chelswuuy son］チョルス（人名）の手」などの例を挙げている。②「NP_1NP_2」の「uy」が出現しない場合は、NP_1の属性語とNP_2の中心語が意味的に包含関係にある場合で、「uy」あるいは他の修飾語も介在できないタイプであると説明している。「강물［kangmwul］川の水」、「우리나라［wu-linala］我が国」などを挙げている。③「NP_1のNP_2」の「uy」の出現が必須である場合は、NP_1が行為者、NP_2が対象の関係にある構成であるが、この構成は比喩による拡張関係であるため構造形式に制約が伴うと指摘している。その例としては、「마음의　소리［mau-muy soli］心の声」、「자연의　노래［cayenuy nolay］自然の歌」などを挙げている。

5）金明姫（1987）は、「uy」の出現有無による意味機能の違いという側面から考察を行っているが、考察の結果、「uy」には、具体的対象を一般化する一般化機能と前接名詞に焦点を与え、それを強調して具体化する具体化機能の二つがあると指摘している。

a.전철역에서　3분　거리

cenchelyekeyse　sampwun　keli

電車の駅から　３分　距離

b.전철역에서　3분의　거리

cenchelyekeyse　sampwunuy　keli

電車の駅から　３分の　距離

（a）の「uy」が出現していない「3분　거리」の場合は中立的な表現であるのに対して、「uy」が出現している「3분의　거리」は、「uy」が前接名詞に焦点を当てて強調ないし具体化している表現だと説明している。

参考文献

李　翊燮，任　洪彬（1983）『国語文法論』學研社

金　明姫（1987）「{의} 의　意味機能」『언어』12-2，248～260，韓国言語学会

고　창수（1990）「고대국어의 속격접미사」『韓国語学新信研究』，241～260，翰信文化社

沈　在箕（1980）「名詞化의 意味機能」『언어』5-1，79～102，韓国言語学会

柳　東碩（1990）「助詞省略」『국어연구 어디까지 왔나』동아출판사

홍　종선（1995）「국어 명사 관형구성의 의미결합 관계에 대한 고찰」『国語学』26，33～58，国語学会

홍　종선（1983）「명사화 어미 ‘__음’과 ‘__기’」『언어』8-2，241～272，韓国言語学会

＊　　＊

景山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

金　善姫（1993）「韓国語の属格助詞「ui」の意味機能－日本語の「の」との対照研究－」『対照研究－属格について』3，36～49，筑波大学つくば言語文化フォーラム

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版

西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』ひつじ書房

Martin, Samuel. E. et al. 1967. A Korean-English Dictionary Yale U. Press